
日常

鳥之巢軍師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常

【Nコード】

N7333L

【作者名】

鳥之巢軍師

【あらすじ】

日常はノンフィクションでありフィクションである。
全て人がそう言えば、何もかもが変わる。

狙撃された被害者

事件現場のフィクションとノンフィクション

事件が謎と言う幕に包まれた時、果たして謎は何色なのか
それは黒でもあり、白かもしれない。

人の言葉に迷うとき 謎の幕は開幕出来るのか

プロローグ

現在は過去である

過去は現在である

未来は現在の希望である

そして

人々は明日という希望を

未来を望んで生きている

もちろん

未来も過去も現在も

全てが進行形なのだ

現在形は過去形であり

未来形は現在形である

時が止まらない限り

時間はただ漠然と過ぎていく

流れる時を止めるのは

川を堰き止めるように

ダムを造れば良いのだろうか

だが

時を止める事は出来ない

ならば

せめて後悔しない日常を過ごすそうではないか

後悔と言う航海に出たならば
未来と言う航海に舵をきればいい

船首は何処を向いている
船尾は何を指している
海図は何処へと続いている

全てが対極
全てが統一
全てが同等

全ては同じものだろう
全ては対極に位置し
全ては統一される

全てが何かを突き止めればいい
それが唯一時を止める手立てかも知れない

日常の習慣が変わる日が訪れるかもしれない
常に日は過ぎていく
常に止まらぬ時間を見て
常時日常は過ぎていくのである。

全ては死のために

事件

サイレンが遠くに聞こえる。
警察が来たようだ。

誰かが銃声を聞いて通報したのだろうか。

この場から、俺は逃げなくては。
捕まるなんて嫌だ。

今頃になって、暗殺した実感が沸いてくる。
スコープから覗いて、頭に銃弾を叩き込む。
血が吹き出て時間が止まったかのように、倒れていくターゲット。

殺した瞬間は感じなかった恐怖感を、今は汗をかくほどに感じている。

来た道から遠く離れるため、右に曲がった。
暗い路地だ。
警察から逃げねば。

サイレンが近づいてくる。
ターゲットが迫って来るかのような錯覚に嵌る。

警官が目の前に居る。
ああ。捕まりたくない。

だが逃げ道はない。
自首するしかないようだ。

警察に捕まりたくなかったのに。

ターゲットの呪縛から逃れなかったのか。

どうやら俺は、捕まったらしい。

警官に手錠を掛けられた時に、ターゲットが笑った気がして意識が飛んだ。

事件？

「害者の身元は割れたか？」

「はっ。害者は、宮本武みやもとたけし50歳。有名な企業の社長ですが、裏社会やぐざと繋がっていたみたいです。現在、一人暮らしをしている模様です。」

「そうか。で、被疑者の身元は？」

「それが、裏社会やぐざ者で、未だどの組かは不明です。」

報告を聞いた、東京警視庁刑事部刑事課第一捜査係の野中のなか洋輔ひろむね巡査長は、被害者である宮本武が倒れていた場所に立っていた。

この路地裏で、狙撃されたと言う事は、何らかの理由がある筈である。

秘書も連れずに、一人だけで訪れたのだから、裏で取引があったのは間違いのような事実だろう。

野中は、周りを見渡す。

狙撃に絶好のポイントはいくらでもある。

周囲は、誰にも気付かれずに人を殺せるほど静かだ。

ナイフでの殺人なら、誰も犯行に気付かなかっただろう。

「東京にもまだこんな場所があったのか」と、捜査主任である竹島警部が言っていたが、

日本全国探せば、いくらでも静かな路地や暗い路地、路地に限らずとも空き地だつてある筈だ。

東京が主要都市であっても、それこそ表があるなら、必然的に裏はある。

表と裏は対極であつて、切つても切れないものである。

「弾痕の位置は何処だ？」

「こちらです。」

所轄の巡査は、すぐに答える。

壁には弾痕が残っている。

たった一発の銃弾が、宮本の頭を撃ち抜いている。

見事な狙撃である。

これが、警官の試験なら、S A T（特殊急襲部隊）の狙撃班にでも、配属だろう。

所が、狙撃班に入れる腕前の狙撃手は、狙撃犯になつてしまつた。^{スナイパー}

「この弾痕の位置からすると、狙撃ポイントの割り出しは出来るのか？」

「はい。あのビルの5階だと思われます。」

所轄の警官が指したビルは、ビルとビルの間わずか30cm程度から見えている普通のビルだった。

ビルと壁に挟まれた路地裏で、殺された宮本。

それを狙撃したのは、壁とビルに挟まれた路地裏から30cm程度の隙間でしか見えないビルに居た裏社会者。

「これは何だ？」

野中は路地裏に、黒い焦げ跡らしきものを見つけた。

「それは不明です。鑑識に言つておきます。」

全ては鑑識の結果で分かる筈である。

「鑑識に任せるんですか。野中さん。俺が、ヤクザ野郎に自白させますよ。」

野中の同期で、同じ第一捜査係の矢島武やしまたけるが言う。

「馬鹿か。お前、そんな事したら自白強要で後々面倒だろうが。」

自白強要で、自白させても裁判で結論を裏返されたら、無意味である。

それこそ、表裏と同じで、対極である。

鑑識が到着した。

現場検証に立ち会う必要は無いと勝手に判断して、野中は現場を後にした。

事件？

刑事だ。刑事が目の前に居る。^{でか}

逮捕されてから、牢屋みたいな場所に入れられた。

今日は、初めて四角い部屋に連れて来られた。

窓がない。ただの四角い空間である。刑事は目の前である。

こんな恐怖の気持ちは初めてだった。

組長が目の前に居てもここまで恐怖は感じなかった。

ここは異様だ。

「取り調べを始めます。」

刑事が言った。

そういえば、部屋に”取調室1”と書いてあった気がする。

「あなたが、宮本武の頭を狙撃したのですか？」

刑事に敬語を使われると、気が滅入る。

暴力団専門の刑事が、組に来た時は、敬語じゃ無かった。

それよりも、俺は何もしていない。

^{スナイパーライフル}狙撃銃の照準をつけた。

^{スコップ}照準器から覗くターゲットは、ただ立っていた。

自分が死ぬなんて考えていない。

そんな事、考えてる人がそもそもあまり居ないだろう。

所が、照準をつけたと同時に、銃声が聞こえ、ターゲットは倒れて
いた。

自分は引き金を引いていない。^{トリガー}

と言う事は、他人が俺のターゲットを奪ったのだ。

だが、俺はターゲットを殺していない。

ただ、”取引が始まったら、頭を撃って殺せ”と言われただけだ。

だから、俺は殺していない。

刑事にそう言った。

途端に態度が変わる。

狭い四角い部屋に、怒気が広がる。

刑事が急に立ち上がる。

椅子が倒れる。

そして、俺を見下して怒鳴る。

「嘘をつくな！貴様が、宮本を殺したんだろうが！貴様以外に現場から逃走した奴が居ないんだよ！目撃証言だって取れてるぞ！・・・

ト

刑事が怒鳴っている。

俺は聞き流している。

やっていない事は、やっていないとしか言いようがない。

それとも、やっていなくてもやったと言えば、刑事の気が収まるだろうか。

なんで俺が、刑事に気を遣わなきゃいけないんだ。

だが、俺のターゲットを奪ったのは。

一体、誰なんだ。

事件？

現場からの逃走者は一人しか居なかった。

現場の弾痕の位置から、狙撃に使用された部屋も見つけた。

もちろん、狙撃銃も見つけたし、そこから照準をつけてみたりもした。

だが、現場検証を何度やっても、鑑識の結果が信じられない。

昨日、野中巡查長が鑑識係に言われたのは、野中が気にしていたと言つより、ただ目に止まった黒い焦げ跡らしき地面の跡である。

鑑識の結果によると、それは銃弾が跳弾した跡であると言つ。

だが、狙撃された宮本の頭には、一直線に銃弾が飛んでいないとおかしい。

地面で跳弾したなら、斜め下から頭を斜め上に貫かなければならぬ。

宮本の頭を貫いた銃弾は、斜め上より斜め下へと進んでいた。

これは、被疑者以外の被疑者が居た可能性。

つまり、現場にはまだもう一人、狙撃手が居たのではないか。

それならば、現場にいた他数の人が第二の犠牲者になった可能性もあったと言つ事か。

だが、野中はまだ腑に落ちない事があつた。

普通、銃弾が跳弾したならば、訳の分からないところに飛ぶ筈である。

それが、綺麗に放物線を描いただろうと鑑識が言っていた。
あり得ない。

否、あり得るかもしれないが、地面に跳弾しただけで放物線は描かない。

それは置いといたとしても、第二の狙撃手が、本当の被疑者かもしれない。

そういえば、今の被疑者は、犯行を認めていなかったな。

だが、催眠術に掛けられた訳でもないのに、「自分が殺したんじゃない」としか言わない。

そもそも、警察に捕まった瞬間、気絶した奴なのだ。

手錠を掛けただけで気絶されたら、手錠を掛けた警官は可哀想である……。

俺は拘置所に入れられている。

息を吸う。そして息を吐く。

そして自分は生きているのだと実感する。

冷たい拘置所の床に手について、夏の暑さを凌ごうと思った。

もちろん、無理である。

手だけがひんやりと冷たい。

この冷たい手で、スコープに写っていた人を殺したのか。

俺がこの手で、独特の冷たさを持つ引き金を引いたのか。

否、そんな感触は覚えていない。

だが、確か銃は反動した。その感触は覚えている。

と言う事は、銃を発砲はしている。

だが、銃を発砲したときに、スコープを覗いてはいなかった気がする。

銃を撃つ瞬間らへんの、前後二十分程度を覚えていない。否、ターゲットの顔が頭に浮かび、思い出せない。

手はずしりとくる重さの手錠を掛けられた時に、ターゲットは笑顔を見せた気がしたのは勘違いだろうか。いや、勘違いだろう。

それだけ、人を殺すことに恐怖を覚えたと言うのか。

これが、初仕事と言うのも関係しているのかも知れない。

だが、俺のターゲットを狙撃したのは、俺じゃない筈だ。いや、絶対俺じゃない。

そうである。いや、そうじゃないかもしれない。

一体、俺はあの時、何をしたんだ。

俺は、人を殺したのか。

とうとう、自分では判断がつかなくなったようだ。

自分の頭で考えている筈の事が、全て疑問になってしまふ。

俺は、どうなってしまったんだろうか。

事件？

俺は未だ拘置所にいれられている。
なにやら、証拠がないとか警官が言っていた。

やはり、俺は何もしていなかった。

あいつを殺したのは俺じゃないんだ。

だが、いつになっても解放してくれない。

何故だ。

警察の取り調べはいつまでも続いた。

取調室も何部屋も回された。

窓がある部屋や無い部屋。

そつえば、精神鑑定がどうかとも言っていた。

俺は精神異常はない筈である。

いや、狙撃した瞬間を覚えていないのだから、精神異常かも知れない。
い。

刑事の怒鳴り声が、今日も四角い部屋に反響して、俺の耳に入る。

「お前が狙撃したんだろがっ！してないと言っておけば良いと組長にでも聞いたのかっ馬鹿野郎がっ！」

刑事はいつまでも怒鳴る。

耳が痛い。

俺はやってないと何度も言ってるのに。

組長は、警察に捕まるときは潔く自分の罪を白状しろと言っていた。
俺はまだ罪がない。

いや、罪はあるのか。
捕まった事がないのだ。

それは良いとして、いつまで続くのだろうか。
刑事の怒鳴り声を聞くだけの時間は。

「野中巡査長！」と呼ばれた。
振り向くと、いつぞやの交番勤務の巡査が居た。

本庁に何か用でもあったのだろうか。

「実は、配属替えになって、巡査長と同じ班に配属されました。」
そう言う事か。

警察と言う組織は、個人の功績によって地方の交番係から、殺人専門の刑事課や、機動隊など、場所がころころ変わる。

階級によっても、配属が変わるらしいが、よく知らない。

何せ、警官になってマルボウと呼ばれて、暴力団の組を潰したりしたぐらいである。

「で、警部より言われたのですが、野中巡査長の相棒になれだそうです。」

結局、俺が1人で動くのを好まない警部殿が、見張りをつけたと言う所だろう。

だが、この巡査は見張ると言う役目であると言う事を放棄するようである。

「何処に捜査に行きますか？」
と聞いてきたのだから。

まずは名前を名乗って欲しいものだ。

「あ、申し遅れました。赤坂警察署管轄赤見見附交番の佐竹智也巡さたけともや

査であります。」

「今は警視庁の刑事だろうが。LA（第一方面）じゃないだろう。」

「あ、そうでした。」

まだ、交番の巡査と言う癖が抜けていないみたいだ。

「で、先輩。どこへ行くんですか？」

「散歩だ。」

いつの間にか先輩と呼ばれている。

悪い気はしない。

だが、交番の巡査気分では、この事件は超えられないだろう。と、思う野中巡査長であった。

事件？

ドアが開く。

「矢島さん。」

呼ばれた。席を立つ。

「何か用ですか？」

先輩刑事だから、敬語は必須だ。

「星を落としてくれ。」

野中には止められたが、俺は自白させるプロだ。否、場合によっては自白強要かも知れないが。この場合は引き受ける方が良いだろう。

「良いですよ。取調室1ですか？」

「そうだ。頼んだぞ。」

頼まれても頼まれなくても、自白させてやる。

取調室1に着いた。

ドアをノックする。

ドアノブが回り、中から刑事が出てきた。

「矢島さん。星は口が堅いです。」

「任せろ。」

俺はそう言っつて、被疑者と机の前にある席に座る。相手の目が変わった。

これは落とせる。

「先輩。外で待機してください。」

部屋から、刑事達が出て行く。

誰も居なくなつた。静かな部屋。

俺はタバコに火を付ける。

被疑者にもタバコを勧めるが、首を横に振りやがる。

「おい。お前、名前は？」

こいつは未だに、名前すら言わない。

「お前、矢島武か？」

さらに俺の質問に答えずに、質問を返しやがった。

しかも、俺の名前を知っていると来た。

「そうだ。もしや、お前、どっかの組で俺を見たのか？」

俺だって、野中巡查長と組んでマルボウだったのだから、組で顔を覚えられている可能性もある。だから、恐怖で皆、自白するのだが。

「いや、俺を覚えてないとはね。武君。」

な、何だと……。世界広しと言えど、世間狭し。この世で、俺を武君と呼ぶのは、1人しか居ない。

中学時代に、俺が虐めていた。鞆持ちをさせていた。水を掛けたり、机に黒いスプレーで色を付けたり。

こいつは、新蔵しんくわう光輝みつあきなのか。

「お前、新蔵か。新蔵なのか？」

「そうだが？」

あのひ弱で、喧嘩にも弱くて、筋力なんて無くて、虐めの的だった奴が、ヤクザになっているとは。

ヤクザになるなら、それこそ、矢島武の方がお似合いなのだ。

「まさか、武君が警察官とはね。知らなかったよ。」

顔写真を見ても、新蔵だとは気付かなかった。

こいつが、犯人だと。

「武君。聞いているのかい。それとも、俺を自白させようと考えてるのかな。」

「おい。知ってるじゃねーか。俺の事。」

知らない奴が、俺が自白させる為にここに居るとは思わないだろう。

ただ、刑事が入れ替わったと思うだけだろう。

それなのに。知らないと言いながら、知っていたとは。

「それは、だって、君が有名な吐かせ屋だからだよ。」

そう。その社会では、知らない者は居ないかもしれない。

俺が、刑務所（ブタ箱）に葬ったヤクザは、数知れず。

野中巡查長と一緒に潰した組も他数ある。

だが、こいつは、本当に新蔵なのか。

「疑ってるのかい。その目は。俺は、正真正銘、新蔵光輝だよ。」

「じゃあ、なんで、俺がお前を見たときに分からなかったんだ。説明してみやがれ。」

「簡単さ。整形したんだから。君達が殴るから、顔が嫌になってね。」

そうか。整形したなら、分からないだろう。

昔の面影なんて、どこにもない。

「で、貴様が、狙撃したんだな。間違いないな。そう言うだけで、

楽だぞ。」

「刑務所が、楽かい？君は、刑務所に入った人の話を聞いた事があるのかい？俺は、組でそんな話をたくさん聞いているが。」

そうだった。昔の新蔵光輝ではないのだ。

「先輩。」

外に待機してるであろう、先輩刑事を呼ぶ。

「ちよつと変わってください。野中さんに話があるので。」

「ああ、野中も居るのか。俺を虐めた2人にこんな場所で会えるとはね。」

野中巡查長を知っているだと。

俺の同期で、こいつを虐めて居た人が、居たのか。

「あれ。武君は、知らないのかな、”鬼の野中”って人。組潰しの

人だよ。俺の高校時代の、同級。あ、そうか。武君は、高校生になる前に、引越しをしたんだっただね。」

こいつ。まだ覚えていやがるのか。

しかも、”鬼の野中”の相棒だったのだ。この俺は。

しかも、野中巡查長が、こいつの知り合いなら、一刻も早く知らせねばならない。

「先輩、任せました。」

そう言っつて、俺は走る。

狭い廊下を、靴の反響音が響いていた。

事件？

「野中巡查長を知りませんか？」

竹島警部に、聞いた。

「俺は、知らないが。あ、そうだ。あいつには、相棒をつけて置いたから、何も心配は要らないぞ。」

そうではない。だが、この人に話しても通じるか分からない。

「いえ。相棒の件ではなくて、急用がありません。」

「そうか。どこに行っただかは知らないな。そんな急用なら、俺が伝えといてやるうか？」

「いえ。結構です。失礼しました。」

人に話せる内容では無いのだ。

野中巡查長を追わねばならない。

否、帰ってくるまで待っても良いかもしれない。冷静になって考えると、帰ってきて伝えても良いことだろう。

デスクで仕事に戻ると、竹島警部から、「野中を探してるんじゃないのか？」

と聞かれたが、「後で結構です」と答えておいた。

せめて、野中巡查長が、携帯を持ち歩いてくれれば良いのだが。

デスクに置かれたままの、野中の携帯を見つめて、矢島武は、そう思った。

「先輩。ほんとに何処に行くんですか？」

「だから、散歩だって。」

さっきから、何回も同じ事を聞かれては、同じように返している。

「先輩、ほんとに何処に行くんですか？」
まだ聞いてくる。

「じゃあーねーな。今から、マルヒ（被疑者）の身元を洗う（調べ）んだよ。」

「洗うんですか。」

「ああ。地取り（周辺の聞き込み）をやるんだ。お前は、まだ八コ（交番）時代が、抜けていないかもしれないがな、俺たちは、アヒル（制服警官）じゃなくて、凸ピン（私服警官）なんだよ。」

「あー。先輩……。隠語ばかり、使わないでください。まだ、あんこ（新入り）なんで……。」

「立派に隠語使ってるじゃねーか。」

新入りで、桜田門（警視庁）の刑事になれるとは、凄い才能を持つてるのだろうか。

それとも、一種キャリアで、警察に入ったのか。

「先輩。なんで、歩くんですか。」

「歩いた方が、楽だろうが。」

「パトロールカーPC使いますよ。」

やはり、PM（交番）時代が抜けていないようだ。

「私服の意味が無いだろうが。」

「はあ。」

やはり、まだ刑事と言う柄ではない。

「で、先輩、何処へ行くんですか？」

「マルジー（暴力団）だ。」

「それって、デカ長（巡査部長の刑事）の仕事じゃないですか！」
そつえば、こいつはまだ巡査だったか。

つて事は、刑事見習いつてところか。

まだ、組に行った事は無いのかもしれない。

「大丈夫だ。着いたら、牛井を頼んで、食ったら本店（警視庁）に帰るだけだ。」

「え……。」

佐竹巡査の顔が青ざめていく。

そんなに怖がる警官が、居るとは。

まあ、これもこれで、面白いが。

野中巡査長と、佐竹巡査が、大通りを歩く。

ゆつくりと、風が吹き抜ける。

人混みを歩くと、裏通りを抜け、また人混みを歩く。

歩かないと分からない店や、道がある。

車からでは、見えない。

否、見えていても、気付かない。

そんな場所が、歩けば分かる。

野中が歩く理由である。

事件？

大通りから、ちょっと右に曲がると、大きなビルが見える。

6階建てぐらいか。このビルの6階を全て事務所に行っているのが、
ここの筋者（暴力団関係者）である。

佐竹巡査が、怯えている。

屈強な男達が、他数取り囲んでいる。

「どこの組が、ここへ来たんじゃ！」

とかなんとか言いながら。

「馬鹿か。お前等、新入りだろうがっ、準現（準現行犯）で逮捕し
てやるうかつ！」

つと脅しただけで、さっさと逃げる。

佐竹巡査はまだ怯えている。

「おい。金バッジ（暴力団幹部）に会ったから、緊張ぐらい解
いとけよ。」

と声を掛け、数歩置いていくと、後からついてきた。

「あ、野中さん。こつちへどうぞ。」

顔見知りの団員が、案内してくれる。

「新入りが入ったのか。」

「はい。」

やはり、さっきのは新入りか。

「いつもみたいに、名前教えるよ。あと、こいつの分と俺の分。牛
井頼む。」

「はい。」

団員一覧名簿と書かれた紙を渡された。新入りは一目で分かる。
顔見知りの団員は、名簿を渡すと、牛井を頼みに行く。

扉が開く。

「ああ、野中さん。」

「おお。組長。」

組長が、別の扉から出てきた。

「今日の用件は？後、そちらは？」

「ああ。今日は飯を食いにな。こいつは、俺の相勤（パトカー常務時の相棒）だ。」

「飯ですか。誰です？」

流石に、話がはやい。

俺がここに飯を食いくるのは、犯人の情報を得るためである。それを繰り返していると、話は分かるようになるのだろう。

「新蔵光輝だ。」

「誰です？それ。」

佐竹巡査が聞いてくる。流石に、知らなかつたらしい。

「佐竹巡査、いいか。ここでの出来事は、カク秘（最上級極秘事項）だからな。警部にも喋るな。」

佐竹巡査は、首を縦に振って肯定を表す。

「なあ。組長。知ってるなら教えてくれよ。今日は、パク（逮捕）らないからよ。緊逮（緊急逮捕）しても良いけどよ。シャブ（覚醒剤）のシノギ（暴力団の資金稼ぎ）は黙っとくからよ。」

明らかに、動揺している組長と佐竹巡査。

流石に、佐竹巡査は場慣れしていない。

組長は、動揺しているので、シャブのシノギは確証が出来た。

「良いのかよ。喋らねーなら、特捜部（特別捜査本部）に至急報（緊急時に優先される無線通信）するぞ。」

「じゃ、喋るよ。野中さん。人が悪いな。ほんとに。」

組長が、やっと口を開いた。

「新蔵は、敵対勢力の組員で、最近入ったばかりの新入りさ。俺たちが、ケツ持ち（会社などのバックにいる暴力団）をやっている会社の社長が暗殺されたんだ。」

「それは初めて聞いたぞ。」

組長は、俺に話した事がない事も、喋り出した。

「新蔵の役割は、何なんだ？」

「ヒットマン（暗殺人）と言う噂だが……。」

組長は、これ以上知らないと言っている。

佐竹巡査は、感心しているみたいだ。

牛井が着いた。

佐竹巡査の、目が変わる。

食べ物を見ると、人は変わるのか。

「野中さん。さっきは、鬼の野中巡査長と知らずに、ご無礼致しまして、」

「良いよ。そんな昔のこと。」

さっきの新入り達である。

謝るぐらいなら、最初から囲まないで貰いたい。

「おい。金はここに置いとくぞ。」

牛井を、佐竹巡査より速く食べ終わってしまった。

佐竹巡査が、食べ終わるまで、何をすべきか。

6階の窓から写る夕焼けは、薄暗くなっていく時間の中で、ただ、赤く燃えていた。

事件？（前書き）

修学旅行中ですが、予約投稿機能を使ってTEEY。
これ、使いやすいノ コーユーときは、便利ですな。

事件？

「野中巡查長！」

帰って来るなり、矢島が呼ぶ。

「どーした？」

「新蔵光輝を名乗る男が、今回の事件の被疑者です。」

「それは、カク秘（最上級極秘事項）だろ？なんで、知ってるんだよ。」

「って、野中さん。知ってたんですか！」

驚かれても困る。なにせ、あいつが捕まる一週間前に、会っているのだ。

「ああ。知っている。高校の同級だ。」

「それは、本人から聞きました。あれ、ほんとに新蔵ですか？俺も新蔵光輝を知ってるんですが・・・」

野中は、矢島の話に驚きもせず聞いています。

内心は驚いているのかもしれない。

「野中巡查長！鑑識課から、連絡です。」

急に呼ばれた。

「矢島、後でな。」

そう告げると、部屋を出る。

鑑識の結果は、鑑識の部屋で聞く方が分かりやすい。

いや、それはただ野中の偏見なのだが。

刑事課でむさ苦しい中にいるよりは、空気が綺麗だと野中は、思っている。

「この結果を見てください。」

若干、ボオーっとして、手渡された書類を、受け取っていません。

「暗殺に使われた銃についてなんですが、銃弾からの情報をまとめました。」

最大射程は700m、口径は、7.62mm x 51、ライフルリングが、4条右回りです。

刑事課の全員に、この資料を配っておいってください。あとは、銃の割り出しですね。」

「野中巡查長。これ、知ってます。」

数分後、鑑識から戻った俺は、すぐに警部を初めとする、刑事課の全員に資料を配った。

そして、捜査会議が始まった時に佐竹巡查が喋った。

「銃が何か分かるのですか？殺害に使われたものと同じの物が？」

警部に質問されている、佐竹巡查。

警部の敬語口調に、若干怯えているようだ。

だが、怯えながらも話し出した。

「これは、Heckler & Koch PSG-1 (Präzisions Schützengewehr-1) ですよ。」

口径は、7.62mm x 51 NATO (.308 Win) 全

長が、1208mm バレル長 (銃身) は、650mm

重量は、8.1kg 最大射程は、700m

スコープが、^{ヘンデルド} Hensoldt 製 6倍 x 42 光学発光装置付き

シュミット&ベンダー製 1.5〜6倍光学式

装弾数は、5 or 20発 (着脱式マガジン・ボックス)

ライフルリングが4条右回り、作動機構はセミ・オートマティックです。

間違いないです。絶対、この銃です。」

佐竹巡查が、断言している。

初めての捜査会議で、初めての刑事見習いが、初めての銃の断定である。

だが、間違っていないようだ。多分、佐竹巡查の言うH&K ;

KのPSG-1に間違いないだろう。

PSG-1は、ドイツの銃器メーカーH&K社が警察の対テロ部隊向けに開発した高性能セミ・オートマチックスナイパーライフル。同社のG-3アサルトライフルをベースに開発され、本来狙撃銃には不向きと言われたセミ・オートマチック方式を敢えて選択している。G3と同様のローラー・デイレイド・ブローバック方式を採用しているが射撃精度を大きく左右する薬室の精度はG3の比ではない。

バレルも六角断面の独特な施条ライフレングを刻んでおり弾頭への干渉を最小限に抑えるとともに、重量を増加し射撃時の微小な振動を抑える事も考慮されている。またあらゆる環境下でも影響を受けない肉厚のヘビーバレルを採用している。ストックは強化プラスチック製でチークピース及びバットプレートはトリガーとともに調整可能である。PSG-1はドイツのGSG-9やイギリスのSAS等世界各国の軍・警察特殊部隊で採用されている。しかし重い重量と発射時のマズル・フラッシュが大きい事から発見され易く、軍用としては不向きで純軍事作戦では使用されない。しかしセミオートで迅速な狙撃が行えポルトアクションに引け劣らない命中精度の為定点狙撃や準軍事作戦等では有効なスナイパーライフルとして軍特殊部隊では愛用者が多いのである。

この銃を使っていると言う事は、『命中精度』を狙ったか。

「佐竹巡査、銃に詳しいんですか？」

現実に戻った。未だ、警部に敬語を使われている。

「学生の頃から、軍事関係が好きで調べたりとか……。」
「なんか、面接の雰囲気だ……。」

「警部！そろそろ、会議を終わらしましょう。」
俺が、強引に捜査会議を終わらせた。

銃の断定は出来た。だが、もう1人、現場に居た可能性もある。そいつが、どの銃を使ったかはまだ分かっていない。

と言うより、現場に2人も人が居たのかすら、確認出来ていない。なのに、捜査会議はお気楽である。

これでは、進むものも進まない。

『為せば為る。為さねば為らぬ何事も。為すべき事を為さざると捨つる人の儂き』である。

やれば出来るし、やらなければ出来ない。やれば出来るのに、やらないと言うのは、どういう事だと。ま、こんな感じだった気もするが、何せ、野中巡査長は、歴史に疎い。

『夜は踊れど、会議は進まず』の方が、合っているのではないかとも思う。

だが、野中には、どっちでも良い。

ただ、捜査会議がお気楽なのに、腹が立つだけである。

結局、捜査会議では何も纏まらない。これでは、会議する意味が全くない。

矢島など、会議に出てすらいない。まあ、あいつは、取り調べだと言えば、会議に出なくても良いのかもしれないが。

ただのお気楽な捜査会議は、陽が真上にある頃に始まり、陽が地平線に隠れるときに終わった。だが、何一つ纏まらない会議は、ただの雑談と化していた。

事件？

冷たい床

ここは、自分の冷たい心よりも冷たいかもしれない。

新蔵光輝はそう思う。

取調室では、本当の自分がどれかを見失い、さまよう。

その間に、昔のいじめっ子であった、矢島を見た気もするし、野中の名前を聞いた気もする。

自分は本当に自分なのだろうか。

誰かに動かされている時がある気がして、それでいて自分は自分だ
と思う。

新蔵は考える。もしかすると、第二の自分こそが、真犯人ではない
のか。

第一の自分は狙撃していないのだから、第二の狙撃手は、自分の中
のもう1人ではないのか。

ヤクザをやってきて、ここまで怯える日はなかっただろう。

組長に怒鳴られるより怖く、冷たく、窒息しそうなくらい空気の悪
い所である。

新蔵光輝は考える。自分が犯人ではないと証明するため。

「野中巡査長。佐竹巡査の姿が見えませんか？」

東京警視庁刑事部刑事課第一捜査係の野中洋輔巡査長は、元相棒の

矢島武巡查に、

元第一方面赤坂警察署管轄赤見見附交番、現東京警視庁刑事部刑事課第一捜査係の佐竹智也巡查の事を聞かれた。

矢島が、佐竹に用があるのは初めてである。

「いえ、俺が用って訳じゃないんですけどね。鑑識からの連絡がありました。」

「どんな？」

「銃の特定に関して、証拠となる可能性があるもので、一度こちらへ来て戴きたい。と言う内容です……。」

鑑識は、このまへの捜査会議を言っているのだろう。

佐竹巡查は、軍事系が好きらしく、兵器は、データを見るだけで当たってしまう。

このまえは、H & amp; K社のPSG-1だと、犯行に使われた銃を特定している。

現場検証で、その可能性が有力となり、佐竹は刑事課で有名である。

その佐竹は、まだ刑事見習いで、刑事課に来て未だ一ヶ月が過ぎても居ないのである。

それなのに、大きな事件やまの、捜査に当たるから、相当である。

そういうわけで、佐竹巡查は、まだまだ扱き使われているのである。今は、先輩達に頼まれた物の買い出しに向かっている。

「じゃあ、後で出向くように伝えてください。俺はまだ、取り調べがあるんで。」

そう。この事件は、被疑者と思われる人物は捕まえているのである。現行犯逮捕というやつだ。だが、そいつは、容疑を否認する。証拠が一切通用しないと云う、まさに、迷宮入り直前の事件である。と言っても、捜査が進めば、迷宮入りする事件もないのだが。

捜査会議では、今後の捜査方針が、犯行動機に絞られた。

だが、本当の捜査方針は、第二の被疑者の存在を確認する事である。現場からは、今の被疑者ともう1人の被疑者が居たと思われる可能性を考えられている。

しかも、被疑者と言うのが、俺の高校時代のいじめられっ子である、新蔵光輝であり、その人物は、矢島武が中学時代に虐めていた人物である。

何故か繋がっているのだが、本人が精神不安定では話にならない。

扉が開く音がする。

佐竹巡査が帰ってきたのかと、振り返るが、そこに居たのは佐竹巡査ではなかった。

動きが止まる。時間が止まる。空気が止まる。全てが止まった。音が消えた。

そこに立っていたのは、手も服も顔も、ペンキを塗ったかのような赤さに染めた、新蔵光輝であった。

事件？

新蔵光輝が立っている。

ドアを開けて周りを見渡す。

俺を見つけて、近づいて来る。

刑事課の全員が、腰に付けているホルスターへと手を伸ばす。

手放せない相棒であり、身を守るのに必要な拳銃が、ホルダーに入っている。それが、ニューナンブ式リボルバー22口径である。それをしっかりと新蔵光輝に照準をつけて構える。

新蔵の手には、陶器製の割れ物で出来た破片がある。トイレか何かを破壊したのだろう。

「動くな！」

刑事課に一齐に声が響く。

開いたドアから、腹部が血だらけの矢島が入ってきた。

「・・・野中さん・・・気を・・・つけて・・・くだ・・・さい・・・」

そう言っつて、その場に倒れた。

「矢島！大丈夫か！」

大丈夫じゃないのは、分かっている。だが、それしか言えない。

「撃つぞ！動くな！」

刑事課の刑事は五月蠅い。

さっさと、撃てば良いだけだ。もちろん、それは許されないが。

「大島警部！射撃許可を！」

警部に許可を求めるが、警部は混乱している。

パーン

拳銃独特の乾いた音が、部屋に響く。

刑事課の連中や、俺の拳銃から煙は出ていない。

新蔵光輝がその場に倒れる。

開いていたドアに立っていた人は、拳銃を新蔵に向けたまま近づき、生死確認をして、立ち上がり、拳銃をホルスターに納めた。

「大丈夫ですか？皆さん。」

そう言いながら、矢島に近づき、矢島にも声を掛ける。

「大丈夫ですか？矢島巡査。」

「なん・・・と・・・かな・・・」

矢島は生きているようだ。

佐竹巡査に射撃の腕があつたとは、知らなかった。

「新蔵を射殺してしまったな。」

「すいません。危険だと思ったので・・・。」

あの後、ドアに立っていたのは、佐竹巡査だと分かった。

佐竹巡査は、射撃の腕前が良かったらしく、新蔵光輝は心臓に22口径弾を撃ち込まれ、即死であった。

非日常

まだ、誰も来ていない静かな教室で、自分が執筆した小説を読む。他人の作品より劣っているではないか。と考えてしまう。

こんな物を、大衆から金を取って、売り出しても良いのだろうか。いや、少なからず読者は居るはずだ。

だが、訳の分からない内容だから、すぐに書店から消えるだろう。

自分で書いた小説なのに、自分で酷評している。

何故なんだ。自分が書いた小説が嫌いなのは。

そうか。十分な知識がないのに、小説を書くからだ。

自分の世界に入り込んでいる。

自分の小説。初めてのミステリー。

全てが、情けなく思える。

教室に、やっと数人来たようだ。

そうだ、この数人に評価してもらおう。

どうせ、この学校の奴らの中で俺が小説を書いていると知っている人が居る訳がない。

ならば、見せてみれば評価が得れるではないか。

「あのさ、この本。読んでみない？まだ売られていないけど、知り合いでさ。」

「ふーん。小説家に知り合いなんて居たんだ。ま、読むから貸して。」

俺の執筆名は、はやしなくりたけ林中栗竹だから気付くはずがない。

「これさ、あり得ないよね。跳弾したのが、放物線を描くなんて。」

「そうだよね……。」

やはり、そうか。習ったばかりの単語を使っただけなのだが。

石を置いただけで、放物線を描くなんて、夢物語はないのか。

物理学では存在しない事なのか。学問になれば、それは起こり得ないのか。

「あとさ、被疑者だっけ。犯人かもしれないって疑われてる人。それをさ、ホントの犯人が、射殺してるけどさ。場所が、警察署の中で良いのかな。自分で武器を持たせた癖にさ。しかも、殺したい相手を殺し損ねてるのに、声を掛けたりとか。ちよつと書き直した方が良いかもよ。」

「分かった。ありがとう。知り合いに、伝えとくね。」

やはり、学生が小説を書いても駄目なのか。

どんなに頑張つて書いても、それを売ってしまえば、商売だ。

客との関係が大切なのは分かってるつもりだ。

でも、自分の小説は、他人の物より出来が悪い。

小説のネタなんて、思い浮かばなければ良いのだ。

自分の頭の中で、小説を考えてるから、ここまで考えなきゃいけないんだ。

始業のチャイムになる。既に、クラスメイトは全員座っていた。

そうか。誰かと合作すれば、自分を超越る作品が出来るのではないか。

そうだ。そうしよう。

ああ。まだ考えてる。小説を書こうなんて。
なんで、考えてしまうんだ。誰かと合作しても、自分が書いた文章
の所を切り取りたい衝動に駆られるだけではないか。

自分が情けなく感じる。

いつその事、登場してすぐに殺された商社の社長の如く、今すぐに
でもここから消えたい。

どう考えても、結局は小説になってしまふ。今だって、自分の作品
の出来事を自分に当てはめてしまった。どうしようもないのか。こ
の考えを振り切れないのか。

無理は無理なのか。

非日常？

矢島は、警察病院送りになった。

佐竹は、事情聴取を受けている。

新蔵は、死んだ。

俺は、暇だ。

野中は、自分の机で考えている。

新蔵は俺を殺そうとしたのか。

矢島に重傷を負わせていると言う事は、殺したかったのか。

そこまで、憎むべき相手なら、なんで会ったときに殺さなかった。

何故、逮捕されてから俺を殺すんだ。

何かに引っ掛かる。

そうか。あの時。事件の前に、会ったのは偶然なのだ。

新蔵にとっては、狙撃の下見だろう。

俺は、ただ散歩していただけだ。

また引っ掛かる。

新蔵は、俺を待っていたかのような素振りだった。

俺が、そこを通るのを知っているかのような。

更に、何かが引っ掛かる。

まで、狂っている。

何かがおかしい。

矢島か、佐竹か、新蔵か、俺か。

いや、この世界自体が狂ったのか。
狂乱か。狂い乱れている。

そもそも、俺は存在するのか。
いや、何を考えている。

一瞬、学生部屋らしき物が見えた気がした。

そういえば、俺の行動範囲が決まっている。
今日は、それ以外の場所に行こうか。

何かおかしい。

やはり、自分の考えが狂っているのか。

いや、自分の考えが狂うなんて事はないはずだ。

目を瞑っている。いつからだろう。

このまま、寝るか。

椅子に座ったまま、野中は眠りについた。

こんな感じでいいだろうか。

自分の部屋にあるパソコンでの執筆。

林中栗竹なんて、名前を付けなきゃ良かった。

本名でも、晒してみるかな。

たけはやししんご
竹林将吾

やはり、自分の名前が2つある気がしてならない。

林中栗竹と竹林将吾

2つが混ざっている。

まあ、それが小説家だろう。

明日にでも、書店に並ぶようにして貰おう。
ちよっと、出版社に掛け合うだけだ。

どうせ、学生だから売らしてはくれないだろうが。

やってみたい事は、やるべきだと思っ。

友達に言われた酷評も、自分で思い悩んだ部分も、何もかもそのま
まで、提出してやろう。

そうすれば、自分の実力が分かるとそう信じてみよう。

それに賭けるのも、また小説家になる一歩だと信じてみたい。

非日常？

「つかれました・・・。」

「ご苦労さん。佐竹巡査、取り調べだっけ。」

佐竹は、憔悴している。

「そういえば、被害者の遺留品の中に本が一冊あったんですよ。それも新刊の。」

「そんな物、あったか？」

野中には覚えがない。遺留品は目を通したはずだ。

「あったんですよ。取り調べ中に、思い出しました。」

佐竹巡査は、見たのだろう。そういえば、野中自身は、途中で帰っている。

「それは良いとして。佐竹巡査、何故新蔵をいや、被疑者を射殺したんだ？」

そうである。日本の警官は、警察学校で、威嚇射撃 相手の武器
腕 足 胴体 頭といった感じで、銃を撃つ。なぜなら、威嚇射撃
しただけで、逃げようとする奴もいるからである。

所が、佐竹巡査は扉に立つなり、新蔵を射殺している。

あの位置から、陶器の破片を手に持った新蔵を確認は出来ないはずである。

また、誰も危機的状況ではなく、ただ照準を点けていただけである。

「いえ。ただ本庁に帰って来るなり、異様な雰囲気でしたので押し入った何者かが、いるのではないかと思つた所、刑事課刑事の全員が、こちらに銃を向けていて、その照準点が誰か分からなかったのですが、武器を持っているのだろうと判断し射殺しました。」

佐竹巡査は、観察眼でもあるのだろうか。あの状況で、新蔵が武器を持っていると判断出来る人は居ないだろう。しかも、矢島が倒れていることも知っていたかのような足取りで近づいている。

野中の思考が、危険信号を発している。これ以上真相に迫るべきではない。

何か得体の知れない物の陰謀がある気がしてならない。

「そういえば、その遺留品の本のタイトルは？」

野中は、話題を少しずらす。

「確か、えーっと。『日常』ですね。」

遺留品リストを確認しながら、佐竹巡査が言う。

野中は聞いていない。

自分が質問したにも関わらず、自分の辿り着きそうな事件の真相に困惑している。

待てよ。佐竹巡査は、何故赤見見附交番から、本庁に来たのか。何故、部屋の中にいる新蔵を、抜き撃ちで射殺出来たのか。

観察眼が優れているからではないだろう。

矢島が倒れているのも、知ってたのか。

これは、事件の真相なのか。

非日常？

有り得ない。

出版社が許可するなんて。

『日常』の出版が許可された。

俺の作品が世に出回る。

それはない。考える、考える。

いや、いくら考えても、それは間違いなく俺の作品だ。

「野中巡查長。どうしましたか？」

職場復帰した、矢島武巡查が尋ねる。

「いや、あの事件が終わっていない気がする。」

今、野中洋輔巡查長と、矢島武巡查は相勤（パトカー常務時の相棒）として、新たな殺人事件の現場に向かっている。

佐竹巡查は、別の奴についたらしい。

矢島が運転するパトカーは、サイレンを鳴らさずに通常走行している。

現場の保持が完了しているので、鑑識の作業が終わるのに合わせて到着するように、通常走行する。

「佐竹巡查が、新蔵を射殺して終わったんじゃないんですか？」

「それに、続きがありそうな気がするんだよ。」

刑事の勘ですか？つと矢島がハンドルを切りながら聞く。

刑事の勘なんてものじゃないだろうと野中は思う。ただ、終わっていないと感じただけである。

それを刑事の勘と言うなら、刑事の勘なのかもしれないが。

「ま、終わった事件とは言っても未解決ですからね。」
矢島が言う。

それも関係あるかと思う。

しかし、未解決の事件はいくらでもある。

「野中さん。そういえば、証拠品に本があつてですね。あれ、知ってますか？」

「ん？ああ、佐竹が言ってたな。なんてタイトルだっけ。えーっと……。」

「『非日常』ですよ、野中さん。あれ、書いたのは、えーっと。」

野中は驚愕する。待て、佐竹は何と言った。『日常』ではなかったか。

今、矢島は何て言った？『非日常』と聞こえたが？

「どうしましたか？」

矢島が心配そうだ。待て、もしかしたら、佐竹巡査が見間違えただけかもしれない。

もしかしたら、タイトル部分の『非』がすり切れていたかもしれない。

野中は見えていない本だから、分かる筈がない。

「矢島……。その本のタイトル部分は、損傷があつたか？」

「いえ、新品でしたよ？」

見間違いはないと言う事か。ならば、佐竹は何を間違えた。

本のタイトルが見えなかったと言うのはないだろうか。

「矢島。佐竹と一緒に本のタイトルを見たか？」

「え、はい。佐竹巡査が、当時の制服警官だったんで。」

見えていたのか。佐竹は、何を隠している。
何を知っている。

佐竹巡査への、疑念が固まっっていく。

「矢島。俺、事件を洗い直すぜ。」

「えっ。何ですか？」

「ちよっと知りたい事があるからな。」

ふっと野中が笑う。

何かが違う。何かが同じ。

「野中さん。俺、手伝いますよ。」

矢島が言う。

「いや、俺は一人で調べるさ。」

野中は単独で行動したい。

そう願う。

「あ、ここです。」

矢島が唐突に言う。

黄色い規制線の向こうに青シートが見える。

規制線付近にいる制服警官に、警察手帳を提示して中に入る。

大島警部が現着（現場に到着）していた。

「害者は？」

近くに居た警官に聞く。

「東京警視庁刑事部刑事課第一捜査係の佐竹智也巡査です。」

野中と矢島の空気が変わった。

「害者が、佐竹なのか？」

「はい。間違いないです。大島警部に仏（死体）を確認して貰いました。」

何故だ？野中の頭が、考える事を辞めた。

非日常？

血にまみれて走る。

後ろから警察は来てないか。

来ていない。

よし、この辺でいいだろう。

周囲に人は居ないか。

居ない。

血を洗わねば。

ナイフで人を刺すところなるのか。

俺の思い通りに動いてくれた駒を消すのは気が引けたが、仕方がない。

所詮、駒は駒だ。使われている時は、盤上を駆け回り、使われていなければ、片付けられる。

捨て駒なんて言葉もあったな。っと思う。

こんなに簡単に、人を殺せるなら、自分で動く必要がなかった。父親を、わざわざ狙撃させる必要もなかった。

ナイフで刺せば良かったのだ。

でも、返り血を浴びてしまるのが難点だ。

返り血か。服が赤く染まっている。今まで青かった空を、一様に染める夕日のように。

『日常』 著・竹林将吾

(前略)

世界は何を基準に回っているのだろう。
太陽か？違う気がする。
法律か？動物に適用出来ない。
人か？無数にいるのに。

人と人と人と人
周りを見渡しても、人しかいない。
建物は皆、人が建てた物。
結局は、人のだ。

何でだろう。世界が白黒だ。
色を付けよう。

原色は何色だ？
赤・青・黄だった気もする。
そうだ。赤が足りない。赤だ。もっと赤いペンキを持ってこい。
それでも、世界には足りないか。
それならば、全て赤い物を探せ。隅々まで。
見つけたか？見つけたら、目の前に出してくれ。

(中略)

腹に深々と刺さったナイフが引き抜かれる。
赤だ。
赤い色が、大量にある。
地面が赤に染まる。
空も赤に染まる。
空間が赤くなる。
ナイフを刺した人物も、赤く染まっている。
待て、その赤は俺の赤だ。
勝手に、人の絵の具から赤を使うな。

相手は聞いていない。否、聞こえていないのか。

俺の赤が、勝手に彼奴に付いている。

返せ。返せ。

相手が震え始めた。相手についていた赤は変わらないのに、下地の色が変わっている。

青だ。真っ青だ。相手が、悲鳴を上げて逃げていく。

俺の赤を返せ。持って行くな。

自分は、青くなりながら、赤を持って行きやがった。

(中略)

自分の顔が青くなっているのに、気付かないまま俺は意識を失い、そして二度と意識は戻らなかった。

(後略)

服が赤い。

小説の題材にする為に、人を刺してしまった。深々と、刺さるナイフ。それを引き抜く感触。覚えている内に、急いで書かなければ。

出版社は、内容表現を豊かにすれば、すぐにでも発売してくれると言っていた。

これで、色のない小説に、明るい色が付く。

いや、ミステリーに色はない。下地が黒いか。

本は、白いのに。

待て、変なことを考えるな。忘れてしまう。

ナイフを深々と刺して、相手の表情はどうだった。

苦しみか。絵の具を盗られた悲しみか。

犯人

「野中巡查長！星（犯人）が分かりましたよ。」
矢島が言った。

「何が証拠だ？」

「指紋です。科警研（科学警察研究所）が、出しました。」
科学警察研究所は、科学捜査研究所いわゆる科捜研ではない。
科学警察研究所は、犯罪科学に関する総合的な研究機関として、生物学、医学、化学、薬学、物理学、農学、工学、社会学、教育学、心理学等、それぞれの専門に応じた部門が配置されている組織である。ちなみに、事件で使われた銃と銃弾は、全国から全て送られてくる。

「そうか。で、星は誰だ？」

「それが……。どうも、少年らしいです。」
未成年の犯罪は、年々増加している。

飲酒、喫煙から始まり、窃盗、暴力、薬物、恐喝、暴走行為と、未成年の前には、他数の誘惑が待っている。
さらには、大人達が、それを進める傾向にあるのも事実だ。

「少年犯罪か。それなら、家裁（家庭裁判所）か。書類送検程度か。」

「いえ。それが……。」

矢島の態度が通常の少年犯罪ではないと、思わせる。

「一応、逮捕状出ましたけど、罪状を読みます。」
簡単ではないと言う事か。

少年鑑別所やら、少年刑務所か、それとも、本当に書類送検か。
法律の改正によって、概ね12歳以上は、少年刑務所に入れる事も出来るようになった。

だが、流石にそれはやり過ぎではないだろうか。

「あの、野中さん。そろそろ、少年宅へ行きませんか？」
いつの間にか、罪状を読み終えていた矢島に声を掛けられてやっと
気付いた。

少年宅へ向かう時は、極力私服である。

また、覆面パトカーを使うのも基本である。

逃走経路が別に準備されており、気付かれて逃げ出されても困るか
らである。

また別の理由として、逃げないように、朝の6時30分や7時に掛
けて家に行くわけだから、

近隣住民が、パトカーだと野次馬になって出てくる可能性がある。

そのような場合、逮捕だけに規制線を貼らねばならず、面倒である。

「覆面を野中さんと乗るなんて、久しぶりですね。」
矢島が言う。

こいつと、マル暴と呼ばれていた時は、鬼と呼ばれたりしながら、
暴力団を潰したものである。

ただ、異動してからは、逆に暴力団を味方に付けた。

と言うより、味方に付けないとやっていけない世界である。

検挙率を上げるためだけでなく、犯罪を減らすためではあるが、あ
る意味、それが検挙率に繋がる。また、簡単に裏が取れるケースも
ある。

つまり、情報を得るのに都合が良いのである。たまに、悪い時もあるが、脅せば一発。

公務員職権乱用と言われても、それが警察であると割り切れればそれ
までである。

そもそも、職権乱用は、

特別公務員職権濫用罪（刑法194条）

裁判、檢察若しくは警察の職務を行う者又はこれらの職務を補助する者がその職権を濫用して、人を逮捕し、又は監禁したときは、6か月以上10年以下の懲役又は禁錮に処せられる。

特別公務員暴行陵虐罪（刑法195条）

裁判、檢察若しくは警察の職務を行う者又はこれらの職務を補助する者が、その職務を行うに当たり、被告人、被疑者その他の者に対して暴行又は陵辱若しくは加虐の行為をしたときは、7年以下の懲役又は禁錮に処せられる（刑法195条1項）。また、法令により拘禁された者を看守し又は護送する者がその拘禁された者に対して暴行又は陵辱若しくは加虐の行為をしたときも、第1項の罪と同様の法定刑とする（刑法195条2項）。

特別公務員職権濫用等致死傷罪（刑法196条）

刑法194条か195条の犯罪を犯し、よって人を死傷させた者は、傷害の罪と比較して、重い刑により処断される。結果的加重犯である。

であり、強要、脅迫をしなければ、強要罪、脅迫罪も適用外であり、よって職権乱用ではないと言ってしまえば、それまでである。

実際、やり過ぎた事もあるかもしれない。

「野中巡查長。行きますか。」

「よし、行くぞ。現時刻確認。」

現在時刻、午前6時35分15秒。

これからが、犯人逮捕の幕開けか。それとも、誤認で、捜査やり直しか。どちらかの分かれ道である。

犯人？

表札を確認し、チャイムを鳴らす。

ピンポン

チャイムが鳴る。

最近の家は、カメラ付きインターホンが多い。ここもそうである。

「はい。竹林ですが、どちら様でしょうか？」

「ちよつと、宜しいですか？お伺いしたい事がありまして、玄関先でお話させて戴けませんか？」

身分を先に提示すると、たまに家族が犯人を助けてしまう事もある。だが、大抵、身分を提示しないのに、玄関を開ける人など居ない。

「はあ。どちら様か分からないと無理です。」
仕方がない。嘘も方便である。

「最近、こちらで事故が起こりまして、近隣住民の皆様へ聞き込みを行っています。」

東京警視庁の物です。」

警察手帳を、カメラに向ける。

「分かりました。ちよつと待ってください。」
そう言われて、玄関が開くまで、数秒。

「お待ち致しました。で、ご用件は？」

「竹林将吾さんは、いらつしゃいますか？」

犯人の在宅確認は必須である。

「はい。子供は居ますが？それが、何か？」

「逮捕状が出ています。刑法第199条殺人罪です。」

「・・・え？それは、間違いじゃないんですか？」

「本人を呼んで戴ければ、確認出来ます。」

本人が居なければ、家族で話にならないのは知っている。

「将吾！警察の方達が来てるけど、何したの？」
大声で、叫ぶ。とつくに起きていたのか。早起きな子供である。

数秒で、出てきた。竹林将吾。

「竹林将吾です。何ですか？刑事さん。」

高校生らしき、風貌である。と言うより、確か現役高校生だった気がする。

「君に、逮捕状が出ている。刑法199条殺人罪だ。署までご同行願いたい。」

逮捕状が出ているが、最初は任意同行を求める。罪を認める人もいるからだ。

だが、この子は違った。

「ちよつと見せてください。」

と言って、矢島が逮捕状を渡すとそれを黙読し始めた。

待て……。確か、昔に暴力団や暴走族で流行ったではないか。

「矢島。それを食わせるな。」

時既に遅し……。とつくに、食べていた。否、飲み込んでいたのか。

逮捕状は、発行に時間が掛かるため、飲み込めば、その時に逮捕されないと言われていた。

だが、今は違う。

「竹林将吾。現行犯で逮捕する。」

竹林が、驚いた表情を見せる。

やはり、知らなかったか。

「竹林将吾。公務員が施した封印若しくは差押えの表示を損壊し、又はその他の方法で無効にする事と言う、封印等破棄罪により、現行犯逮捕する。」

竹林は、逃げようとするが、遅い。とつくに、手錠を掛けている。

動ける筈がない。

パトカーの中に、連れてきた。

「おい。刑事さん。それは、逮捕状に適用されるのか？」

「知らないなあ。残念ながら、法律に疎いからね。」

「さつき、なんか説明したじゃないか！」

「ああー。あれは、とっさに難しい言葉を並べただけ。」

竹林将吾。普通の少年である。

ただ、犯罪を犯さなければ、良かったのに。

竹林将吾は、洗いざらい話した。

父親が会社の社長だったから、会社の社長が殺されるミステリー小説を書きたかったから、

ヤクザを雇って、殺した。ついでに言えば、憎かったらしい。会社の社長として有名になればなるほど、裏金やらなんやらで、悪い方に流れていくのが許せなかったそうだ。

また、そのヤクザがいつ口を開くか分からなかったから、ヤクザの過去を洗いざらい調べて、その知人である警官がいる場所を選んだり、そいつがいつ喋るか怖いから、佐竹と言う警官に金を渡して、殺害させたり。ただ、事前に新蔵^{ヤクザ}には、連絡を付けて、行動を起こすようにさせたらしい。だから、あの時、佐竹はためらわなかったのだ。

そして、最後は佐竹が喋るのが怖かった。けれども、誰かに依頼すれば、またその恐怖が来る。だからこそ、自分が殺したのだと。

だが、出版社にリアリティーが乏しいと言われた事も、ある程度、関係しているみたいであった。

彼が仕組み、彼が発動し、彼が幕を閉じた事件は、こうして落着し

た。

だが、何かがずれている世界感に、野中は戸惑いを隠せぬまま、事件のない通常業務へと戻った。

犯人？

林中栗竹はふつと笑う。

小説なんて、こんな物かと。

いや、リアルに書けば書くほど、筆が進まない。

だけれど、リアルに書かなければ、読者がつかない。

リアルを求めすぎれば、間違えた情報があるかもしれない。

リアルを求めすぎなければ、それはSFになる。

いや、リアルなSFもあるのか。

出版社の人は、聞いてくる。

「この小説の見所は？」

それに俺は毎回答える。

「見る人によつて、内容が変わる事ですかね。」

相手は、頭にハテナマークをたくさん浮かべているに違いない。

「どういう事ですか？」

やはり、聞いてくる。

「つまり、人それぞれの解釈があると言う事ですよ。何も、登場人物が変わったりする訳ではないし、話の内容が変わるわけでもありません。そうになったら、心霊現象になっちゃいますよ。」

いや、そんな小説も出来るかもしれない。

例えば、インターネットを使って、自分のホームページなら、簡単だ。

面倒なぐらいページを作らなくてはならないが、それであっても見る者には興味がわくだろう。

「はあ。確かに心霊現象ですね。」

この本は、心霊現象の為に出すのだ。

本のタイトルは、日常であり、非日常なのだ。

それは、見る人によって変わる。

時間は、過去を遡り、未来を見て、変わる。

この本も、過去を遡れるし、未来を見れる。

ただ、読者によっては、過去を遡れても未来を見れない人もいるし、逆に、未来を見れて、過去を遡れない人もいる。

もしかしたら、どちらも駄目な人がいるかもしれない。

ただそれは、全て、読者の解釈であり、筆者は関係がないと林中栗竹は考える。

「出版に関しては、会議で決定次第、出版日と部数を提示します。

その際に、こちらから、お金等を振り込ませて戴きます。その後は、何かと本の売れ行きでお金を振り込ませて戴きます。」

そういえば、俺はどんなジャンルの本を書いたんだっけと、自分で考える。

ミステリー？SF？それとも、ジャンルすらないのか？

俺には、ジャンル未設定が、一番合っている気がする。

俺は、出版社を出てすぐに電話を掛ける。

「あ、警察庁長官。ご苦労様です。実験終了です。ええ、本で人を操る事は可能でしたよ。いやー。演技するのも大変ですね。まあ、後で入金確認して本庁にて、通常業務へ戻りますので。」

「おかしなものだなー。たったの、数ヶ月。人の心を操る心理実験に参加して、金を貰える。しかも、俺の周囲の人間を操り、俺以外の真犯人が捕まる。それをまた本にして、偽名である林中栗竹で、

出版出来るんだから。」

再び、林中栗竹だった人物はふっと笑う。

まだ、昼前だ。

もう少し、暴力団事務所に居た事にしよう。

どうせ、元マル暴だから、誰も、気にしない。

警視庁刑事部刑事課第一捜査係の連中は、心理操作による犯人逮捕をしらない。

つまり、誤認逮捕なのだが、誰も気付かないだろう。

俺は、その誤認された人物、つまり、逮捕された奴が手錠を掛けられる時に、隣に居たのだから。

ああ。腹が減ったなあ。っと思いながら、矢島武巡査は、出版社を後にする。

エピソード

さて、短い小説だった……。

読者の皆さんは、長い小説を書いて欲しいって思っている人も居るのか居ないのか……。

まあ、その辺は気にしないので、良いんですが、ちょっと無理矢理すぎましたかね……。

なんか、無理矢理に終わらしてしまう傾向がある模様です……。

それでも、今までの小説と呼べるか分からない物よりは、ましかな
っと思ってます……。

これから、もっと長く文章や構想を考えられるようにしたいと思って
いますので、応援お願いします。

今回は、ある程度長く書く事と、誤字脱字を減らす事、リアリテイ
ーを求めつつ小説であると認識させたいような感じにしたいと思っ
ただけだった事……。

まあ、サブタイトルとか、考ええなかったので……。

さらに、たまーに間違った情報が入っている可能性もあると言っ
……。

やはり、風景描写は難しいですね……。

何せ、ホントの殺人現場を見たこともないし、知り合いに警官が居
ないし、もちろんヤクザも知り合いが居ないし、警察用語や法律系
は調べてただ調べてコピペしたり……。

けれども、構想を練ったりするのは、楽しいですね。

案外、自己満足で書いていたのが、評価されたりしますからね。

さて、ちよつとネタバレを書くので、先に此処を読むって方はまさか居ませんよね？

矢島武が、犯人だったんですって書いても、実は嘘になりますね。警察庁長官が犯人だったんですって書いても嘘になります。

犯人は、皆さんの想像にお任せします。

と言っても、これって間違いなく国家的犯罪ですよ。心理実験を行っているんですから。

つまり、矢島武も、警察庁長官も、国家の駒に過ぎないと言つ事です。

はい。なんか此処で犯人あかしまいになってしまいました……。

尚、次の小説はまだ構想段階です。

あんまり期待をされるとがっかりされる可能性があるのですが、あまり期待はしないで貰いつつ、それでも、他数の読者の皆様に感謝の気持ちを持って次の小説を書くと言つ決意を持って、新たに次のステップへ進みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7333/>

日常

2010年11月20日10時48分発行